

1985年12月、日本DNAデータバンク（DDBJ）に助教授として着任した宮沢三造は多くの困難に直面していた。

さしあたつて所内で借りられる計算機は、集団遺伝学グループが持つ中型機「FACOM M-150 F」だった。当時の日本では主流の「メインフレーム」と呼ばれる計算機だ。機密保持性の高い構造であり、銀行や大企業のシステムに適している。個々のユーザーがシステム全体を管理することはできない。



1987年に完成した計算機室

学研究所特任研究員

(伊東真知子・国立遺伝

一方、データバンク構築で先行する米国では70年代からUNIXが急速に普及していた。オープン系と呼ばれるシステムで、ユーザが自ら管理することによ

つて自然に知識が身につく。「米国では研究者全体の技術レベルが高かつた」と宮沢は振り返る。先行する米国とのデータ交換を円滑にするためにも、宮沢はオープン系計算機の導入に向けて仕

て派遣された。臨機応変な雇用制度がなかつた日本の大学では、計算機の性能を多少犠牲にしても人手がつくほうありがたかつた。

しかし所内で主に計算機を使う集団遺伝学グループにとって、メインフレームでも不自由はなかつた。

さらに、国産のメインフレームには情報研究センター棟に計算機室が完成した。搬入されたのは富士通の大型計算機「FACOM M-380」。宮沢が望んだ米国製ではなかつた。

87年1月、建設中の遺伝情報研究センター棟に計算機室が完成した。搬入されたのは富士通の大型計算機「FACOM M-380」。宮沢が望んだ米国製ではなかつた。

（伊東真知子・国立遺伝